



【評者】

小山 幸代

北里大学看護学部教授

会話分析が導く患者参加へのアプローチ

ヘルスケアの主体が患者であるということは、専門職にとっては自明であるし、多くの患者が期待することでもあるだろう。近年の社会情勢もそれを推進している。しかし、現実のヘルスケア実践の場で、理念としての“患者主体”が容易に具現化できるものではないということも、私たちは日々の経験から痛感している。本書は、こうした“患者主体”が、専門職と患者とのコミュニケーションにおいてどのように実現あるいは阻害されているのか——すなわちヘルスケア場面における患者参加の実態——を、さまざまな質的研究の方法を組み合わせながら探求している。

なかでも多用されている研究方法が会話分析である。会話分析は、相互行為としての会話を分析する社会学の質的研究法である。会話分析を用いた研究では、実際の相互行為場面の録音・録画を分析データとして、独自のルールに従って文字化したデータを提示した詳細な分析過程が示される。この分析過程が実に興味深いのである。本書で提示されているデータの多くが、専門職が日常で当たり前に行なっている患者との会話である。しかし、そんな当たり前の会話から「看護師のこの発話がこの位置でなされたことによって、患者が関与する機会が奪われている、なぜならそれは…」と、当事者も気づかなかったような事実が明らかになってくる。それぞれの事例の分析過程をたどる際には、ぜひ自分が行ってきた患者とのコミュニケーションについて振り返りながら読み進めてほしい。「ああ、そうだったのか!」と反省を促されるデータや、「このように話しかければ、それがきっかけとなって患者が関わるチャンスが生まれるのか」と気づくデータに出会うだろう。

専門職が自らの実践を反省的に振り返るための素材が豊富なだけでなく、患者参加の研究に関わる知

患者参加の質的研究

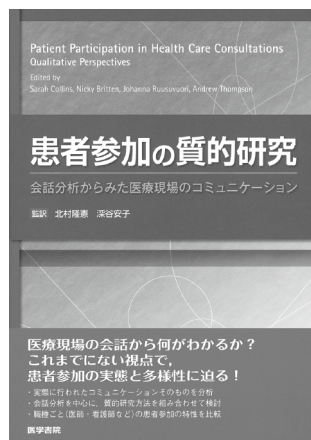
会話分析からみた医療現場のコミュニケーション

北村隆憲・深谷安子監訳

A5判・344頁・2011年発行

定価3,570円(定価3,400円+税5%)

医学書院(TEL: 03-3817-5657)



見が詰まっているのも本書の特徴である。会話分析はもちろん、回顧的シンクアラウド法など、本書で用いる質的研究の方法は事例つきで解説されており、それぞれの利点・欠点や組み合わせ方などについても言及されている。また、本書の最後では、患者参加に関する概念モデルを組み立てている。複数の事例を統合することで、患者参加の全体像を概観しようという興味深い試みである。さらに、巻末の付録の練習問題は、患者参加の研究だけでなく、教育・実践を意識した教材になっているなど、アイデア満載の書である。

さて、私自身、数年前より会話分析の方法を用いた研究を試みている。その経験から、会話分析は、「看護師が患者と当たり前に行なっているコミュニケーション過程がどのように(how)組み立てられているのか」というリサーチ・クエスチョンに適した研究方法であると考えている。コミュニケーションは、通常あまりに当然のこととして行なっているために、当事者にとっては踏み込んで説明することが難しい面がある。しかし、会話分析を用いることで、コミュニケーションという相互行為に内在する秩序が当事者たちによってどのようにつくりだされていくのかを詳細に分析できると実感している。会話分析は、これまで看護研究において用いられる機会が少なかったこともあり、馴染みのない読者も多いかもしれない。しかし、基本的な考え方や手法については本書の冒頭で訳者によるわかりやすい解説がなされているので、会話分析を理解した上で読み進めることができるだろう。本書は“患者参加”という視点から専門職のコミュニケーション実践を振り返るために大いに役立つ書だと思われるが、“会話分析”という研究方法が看護研究に広がっていく契機になることも期待したい。